

生活の視点を活かした農業活性化を考える

農業経営改善支援センター担当者研修会の開催

平成14年8月8日、農林中金総合研究所の根岸久子さんを講師に迎え、農業経営改善支援センター担当者研修会が開催されました。市町村・農協の担当者や山武農業フォーラム実行委員・農村生活アドバイザーなど約100名の参加で会場は満員状態で熱気ある研修会になりました。

根岸さんは、安藤昌益が男女を「ひと」と読ませ、男女協力は江戸時代から提示されていたことを皮切りに事例を示しながら話してくれました。



「食の安全性」問題が提起したもの

農業等の後退により、食料自給率は40%に低下し、遠くから長い時間をかけて輸入することになった。その結果、食べる人と作る人が離れ、食の簡便化・画一化がすすんだ。食べ物を作る人と食べる人が離れることは工業製品と同じであり、そこに輸入野菜や添加物が入ってくるようになった。

「生産性のみの重視」への反省

農業者や農協組織は「輸入食品の増大や生活の変化」に対応しないで、「生産性のみ」重視した生産をしてきた。地産地消運動の展開で、農業白書でも食教育や子供の食に目を向け始め、地元の消費者が重要なのだとようやく理解し、農業振興計画に地産地消が入るようになった。



地産地消の大きな取り組みは「給食」

地産地消運動に必要な視点は「なぜ地産地消・直売をやるのか忘れてはいけないし、顔の見える関係を作り、安定的に地元の農産物を自覚的に買ってくれる消費者をつくること」で、地元農産物を使った学校給食をどれくらい広げるかにかかっている。

男女共同参画は農業活性化に不可欠な課題

家族経営協定は女性の労働をきちんと評価し、女性が経済的地盤を作ることで、高齢期にも対等な関係を保つ点で重要である。

給食の民間委託では食教育はできない

民営化は、市町村の判断に任されており、市民運動により民営化は進んでいない。「給食を民間委託する」のは経費削減のためで、調理師をパート化し食材も安く簡便な加工・冷凍食品に換え、添加物や味が濃くなる。このような給食では食教育はできない。食教育とは栄養教育でなく、「食べることが健康とどう関わるか・何を食べたらよいのか」を教え、献立を通して背後にある農業を理解し、何を食べたらよいのかを考えるものである。

討論には10人以上が発言し、拍手ありの活発な討論会になりました。

実践！ 環境に優しい農業

天敵を使っていちごの減農薬に取り組もう！！

自然界では、天敵により特定の生き物だけが増えすぎないようにできています。天敵を上手に利用することで害虫防除回数を減らすことができます。いちご栽培の場合、アブラムシの天敵としてコレマンアブラバチ、ハダニ防除にチリカブリダニ、アザミウマ防除にはククメリスカブリダニなどがあります。



天敵による防除のポイントは、とにかく観察です。害虫の発生状況を確認し、発生極初期を見逃さず天敵を放飼することが大切です。既に多発している場合は天敵に影響の少ない殺虫剤で害虫密度を下げてから導入します。また天敵が安定して生存しているか確認し、必要に応じて追加放飼します。放飼する時期は、秋のハウス密閉後10月下旬から11月上旬の低温期前に1回目を行います。翌年2月以降に追加放飼を行い春以降の害虫多発期に備えます。

山武管内のある農家では、秋の放飼前に、ムギをポットに栽培しておき、そのムギに天敵のエサとなるムギクビレアブラムシ（いちごにつかない）を定着させ、コレマンアブラバチをすみやかに増殖させる方法で、ほとんど収穫期のアブラムシ防除は行わずに済むほど効果を上げています。

いちごは、直売や摘み取りなど直接消費者と接する機会が多く、栽培に気を遣う場面が特に多い品目です。天敵防除は省力技術の一つとして是非取り入れたい技術です。生産者の中には出荷箱に天敵利用であることを明記したり、ホームページに天敵への取り組みを紹介するなど販売への付加価値化の一つとして積極的に天敵を活用している人もいます。

飼料畑の強害雑草！

トウモロコシ畑でのイチビ防除

強害雑草イチビ

最近管内の飼料畑で、写真のような雑草をみかけます。これはイチビ（アオイ科・インド原産）と呼ばれる1年生の強害雑草です。草丈は2mにもなり、さく果と呼ばれる半球形の果実を次々とつけます。1つのさく果には40個ほどの種子がはいっています。また休眠が深く長期にわたってダラダラ発芽するため、防除に失敗すると爆発的に増殖してしまいます。



イチビはアレロパシー物質()を分泌しており、20本/平方メートル以上あるとトウモロコシは30%以上の減少になります。また、機械収穫にも支障をきたしたり、5%以上混入してくると嗜好性が大きく低下してきます。

体系防除が効果的

トウモロコシ収穫後、刈り残ったイチビは、急速に成長し開花結実してきます。来年の埋土種子を増加させないためにも、収穫後は早急に耕耘をして下さい。

発生してしまった畑では、慣行の土壌処理だけでは防除しきれません。播種後の土壌処理（ゲザノンフロアブル等）に加えてトウモロコシ3～5葉期の茎葉処理（シャドー水和剤・ワンホープ乳剤・バサグラン液剤）の体系処理で効果が確認されています。

糞はたい肥化を

輸入乾草を給与し生糞を土地還元したことで、ひろまっています。たい肥化し60以上の温度に達すればほとんどの種子は死滅します。高品質の自給飼料づくりからも完熟たい肥は不可欠です。

アレロパシー物質：他の植物に対し阻害的あるいは促進的に働く化学物質。

T S W V の 脅 威

バカにできないアザミウマの被害

近年、トマト、ナス、メロン等の野菜類やキク、バラ、トルコギキョウ等の花き類でえそ症状を引き起こすウイルス病（T S W V）が全国的に問題となっています。

T S W Vとは

T S W Vとは、トマト黄化えそウイルスの英語名の略称です。

このウイルスは、アザミウマ（ミカンキイロアザミウマ）によって伝染し、野菜から花き・雑草まで、感染植物は92科1050余種と極めて広範囲です。

被害状況

特徴的な病徴は、一般的には葉の激しい黄化、輪紋、えそ症状、葉柄や茎のえそ条斑で、商品価値を落とします。

球根切り花では、開花不良や球根の品質を落とします。このような球根は、次の作付けには使用できません。

大切なアザミウマの防除

- 1 成虫の体長は1～2mmの紡錘形です。
- 2 花粉を餌にするので、花に集まりやすいが、花が無い場合は芽や葉裏にも寄生します。小さいので目に付きにくいので、知らぬ間に多発していることがあります。
- 3 発生すると、葉の光沢に変化が現れますので、ルーペ（虫メガネ）などを使って早めに虫を確認し、防除のタイミングを逸しないようにします。
- 4 施設の出入り口や開口部に防虫ネットを張り、アザミウマの侵入を阻止します。
- 5 青色の粘着紙を施設の開口部に吊し、アザミウマの発生を調べ、殺虫剤の散布時期を決めます。
- 6 収穫終了後の作物は速やかに施設外へ出し、処分します。
- 7 施設内外の雑草は除草します。
- 8 薬剤防除は、登録農薬の中からローテーション散布します。



写真提供：千葉県農業総合研究センター 応用昆虫研究室

直売に向く野菜 ・ 花づくり

ブルーベリー

目に良い果物として注目のブルーベリー。病害虫が少なく整枝・剪定などの手入れも簡単、寒さにも強く、植え付け後3年目からは少量ながら収穫も始められる直売向きの果樹です。

多彩な品種

千葉県で作られているブルーベリーは、大きく分けるとハイブッシュ系とラビットアイ系の2つになります(表)。

ハイブッシュ系は実が大きめで1本でも実がなりますが、暑さには少々弱く、根もデリケートで酸性を特に好みます。

ラビットアイ系は樹勢が強く、実は小さめですが、完熟してから収穫すると甘く美味しい実が採れます。自家受粉しないので2品種以上植えます。

それぞれ多彩な品種がありますので、自分の土地にあう目的に合った品種を選びましょう。

	ハイブッシュ系	ラビットアイ系
樹勢	中	強
樹高	1～1.5m	1.5～3m
果実の大きさ	大	中
結実性	自家受粉	他家受粉
土壌pH	4～4.5	4.5～5
収穫期	6上～7下	7中～8下

勤どころは土作り

ブルーベリーの根は酸性土壌をととても好み、乾燥や過湿を極端に嫌います。ピートモスやもみ殻を鍬込み、通気をはかるとともに土壌を酸性にします。

植え付けは11月か3月

酸度矯正していないピートモスを1樹あたり10リットル以上用意し、植え穴の土に混ぜます。苗木をポットから抜き、深植を嫌うので浅く掘った穴に置きます。水を含ませたピートモスで根をくるむと良いでしょう。土をかけ両手で押しつけて落ち着かせます。足で踏みつけるなど土を固めることは良くありません。

収穫は3年目から

株元を乾燥させないようにもみ殻、おが屑、稲わらなど有機マルチ資材を厚く敷くことが良い生育の秘訣です。最初の2年間は花芽を取り、実を付けずに大きく育て3年目で収穫します。

肥料は控えめで、2月に1樹あたり油かす100g程度。3年目から込み入った枝や弱い枝の剪定をします。

フレッシュ ・ ニューファーマー

成東町 今関 百合 さん

都会暮らしの人達の農村や農業に対する憧れはとても強いものです。農家にとってはあたりまえの景色や農作業に安らぎを感じたりもします。



そういった場を自分が提供できれば、そんな夢を持つてがんばっているのは成東町松ヶ谷の今関百合さんです。今関さんが就農したのは4年前。就農をきっかけに、ダイコン、ハウレンソウ中心の市場出荷に加え、消費者とより交流がもてる朝市と農協直売所「緑の風」での販売に取り組むようになりました。

「消費者との交流を大切にしていきたい。」今関さんがそう考えるようになったのは、大学卒業後の1年間のドイツでの農業研修での経験が大きいようです。その農場では、お客さんの要望を聞いて宅配の野菜セットを作ったり、夏には農場を開放して楽しんでもらったりと、消費者との交流をととても大切にしていました。

就農2年目に立ち上げたホームページがきっかけとなって、全国に仲間もできました。人との出会いを一番に考える今関さんの当面の目標は農業に関わる人たちを結ぶネットワークをつくることだそうです。「成東町は消費地にも近く、観光地でもあるため、シーズンにはたくさんの方が集まってきます。農業を体験したいという願望を抱く人も少なからずいるはずです。こんな恵まれた環境で農業が出来ることに感謝しています。」と熱く語ってくれました。